これからの市役所と未来塾

直方市役所の職員研修に『未来塾』があります。今年で3回目の開催であり、去る1月14日と15日に開催しました。

この研修は、若手の職員が自発的に企画運営し、未来の職員を育てたいという希望をもって取り組んでいます。私もこの研修に参加しました。

テーマは、『20年後の市役所』です。

研修は、ワールド・カフェという対話方式で行いました。4、5人の参加者がテーブルを囲み対話します。テーブルの上には、テーブルクロスのように大きな紙が敷かれ、8色のマーカーペンが置かれます。各テーブルが一つ一つの『国』に見立てられています。多数の国があるから『ワールド』となり、そこで参加者がリラックスした雰囲気で対話をするので『カフェ』となり、こうして『ワールド・カフェ』と呼ばれるようになりました。

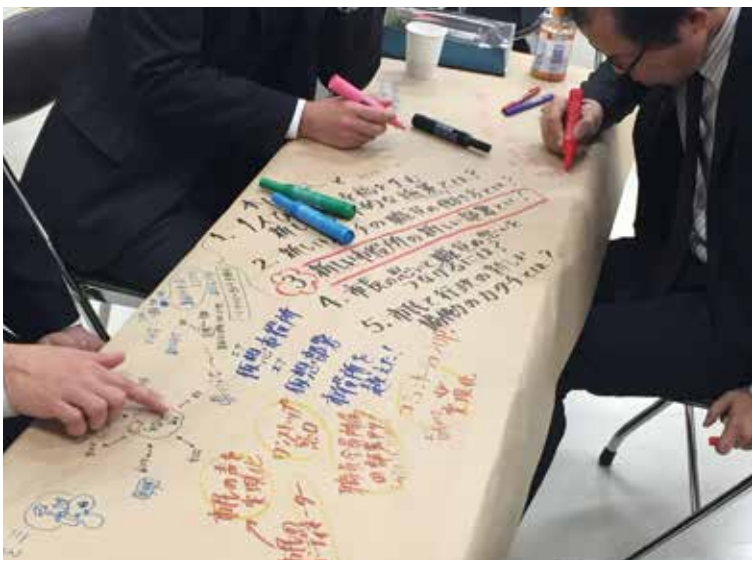
参加者は、一つのテーブルに固定することなく、旅人となっていくつかのテーブル、すなわち国を移動し、旅をします。こうして多くの考えが混ざり合い、多様な対話が成立します。

対話にはルールがあります。

▽相手の言うことを否定しない
▽自分だけが正しいと考えない
▽自分だけが話さない（ひとりの持ち時間は1回につき1分ないし2分）
▽沈黙を尊重する

沈黙は何かが生まれる前兆なのです。対話では、相手を打ち負かすことはありません。

そして、対話の中で気になったことや発見したこと、それに触発されて気付いたことをマーカーペンで大きな紙に落書きのようにメモします。一色ではなく、多数の色を使ってメモすることによって、気づきや考えの過程が明らかになります。



直方市長　壬生隆明

さて、各テーブルの対話から持ち上がった20年後の市役所はどうだったでしょうか。残念ながら、どれも暗いものばかりでした。人口が減少し、高齢化率が50％を超え、市民の孤立や孤独が深刻となり、自殺者が増加し、市はやがて財政的にも自立性を失い、近隣の大きな自治体に合併されて消滅する…というものでした。

しかし、このまま手をこまねいているわけにはいきません。では、20年後には、どんな市役所であってほしいと願うのでしょうか。市民一人一人の幸せを生むための市役所ってなんだろう、新しい市役所の新しい役割ってなんだろう…。こうして夢に向かった対話が始まりました。

「幸せって何だろう。」

「美味しいものを食べること。」

「安全で安心なこと。」

「人から認められ、誰からも排除されず、誰も排除しないこと。」…

「しかし、何が幸せかを知るには、まず不幸を知らなければならない。」…

「そうだ、街中の不幸を集めよう。不幸だと思う人から、その不幸を集めよう。そうすれば、何が幸せかがわかるはずだ。」

「市役所に『不幸課』を作ろう。職員が一手に不幸の嵐を吸収し、『不幸』の代わりに『幸せ』を届けよう。表には「不幸課」と記し、裏には「幸せ課」と記した看板を立てよう。不幸課を出る時には幸せになってもらうように。そして、市民が幸せになれるように、心から褒めてあげる職員がいて、不幸な人と一緒に泣いてあげる職員も置こう。悲しく、疲れた人にはそっと寄り添ってあげる職員を置こう。」

「また、これまでのように市民が訪れるのを待つ市役所ではなく、住民票や戸籍謄本の請求があれば、職員が出向いて行って届けるようなデリバリー市役所にしよう。」

「小学生や中学生や高校生が市政を考える部署を作ろう。」

「長寿ばかりでなく、健やかな人生の最期を迎えられるような『終活課』を作り、最期にかかわる様々な問題を一つの窓口で解決してあげる部署を作ろう。」

「街中の空き家に市役所を移そう。」

……

若者たちのエネルギーの渦に巻き込まれ、私は大きな夢を持ちました。

きっと市役所は変わる‼

そして、このまちは変わる‼

これから、市民の未来塾を開催しましょう。

この街の未来と夢のために‼